



Buddhist's Digest

VOLUME 1 NO. 4

JULY 7, 1943

HEART MOUNTAIN BUDDHIST CHURCH WEEKLY JOURNAL

O'BON COMMEMORATION JULY 10-11

SIGNIFICANCE OF O-BON

O-Bon services have been in practice ever since the time of Gotama Buddha, six centuries before the birth of Christ. Originating in India, the custom passed on into China in the year 538 A.D., the time of the Wu Emperor of Liang. And in the third year of Saimei which is 657 A.D. in our calendar, it was first observed in Japan.

The word O-Bon is derived from the Japanese and Chinese word "Uranbon" or "Urabon" which is Ullambana in original Sanskrit. The Urabon is the correct term for the service, but in its long history the first syllable was discarded and it became just simply "Bon". "O" was applied as an honorific. Thus, today we have the word "O-Bon." Ullambana means to hang upside down. Mogallana's mother was hanging upside down and was suffering and she was saved by her son's deep piety and the teaching of Buddha. Bon is a tray or bowl. It is an article in which foods or gifts are carried. So "O-Bon" means to carry foods or gifts and give to others.

There is a four-fold significance in the O-Bon service. Namely the spirit of giving, the feeling of peace and harmony, the expression of gratitude and the thought of parental piety. The O-Bon was first started by Mogallana, one of the ten great disciples of Buddha. He was always very thoughtful of his mother. Then he learned that she was suffering in the hell of greediness because of her past selfish deeds. He was very much concerned and attempted to save her, but it was beyond his power. He went to Buddha for advice. Buddha told him to invite noble teachers and friends and perform a service and to give a feast to all after the service. He did as he was told. His mother listened to the words of the noble teachers and realized for the first time the right way of living and the happy and harmonious friendship created through the spirit of giving at the

feast and enabled her to overcome her selfish greediness. Mogallana was so overjoyed when he saw his mother saved at last that he found himself dancing. Soon everybody joined him. The feast ended with a happy and harmonious dance. This is the origin of Bon Odori.

On O-Bon we hold a memorial service to pay our respect to our beloved ones and to express our gratitude to our ancestors to whom we owe our existence. The observance of O-Bon refreshes our minds to live a more harmonious and peaceful life at home and in the community through its spirit of giving and Bon Odori. It also reminds us that the origin of any kind of suffering has its roots in selfishness. And the selfishness is overcome only by the spirit of giving as it did for Mogallana's mother. Buddha teaches that giving is the prime importance to salvation.

Therefore, it has become a custom and tradition in Japan that in the O-Bon season gifts are given to friends and relatives. Thus we encourage the spirit of giving through which we can live a more intimate and harmonious life.

FACTS ON BUDDHIST CHURCH

Being of non-sectarian organization, an interesting fact was revealed on the Heart Mt. Buddhist Community Church.

Represented by all Buddhist sects adhering to the teachings of Shakyamuni Buddha, it reveals a composite picture of an org-

O'BON SERVICE PROGRAM

Sat. July 10	
2:00 P.M.	Service at the cemetery
6:30 P.M.	Evening Service 17-25
7:30 P.M.	Bon Odori at Block 17 vacant lot.
Sun. July 11	
9:00 A.M.	Sunday School 17-25, 14-25, 24-26
10:30 A.M.	Young People's Service 17-25
2:00 P.M.	General O-Bon Service 17-25

S.S. TEACHERS ASSOCIATION

Officers were selected at a recent meeting of the newly organized Sunday School Teachers Association of the Heart Mt. Buddhist Church. Those chosen were Hiromi Inouye, president; Fred Yonemoto, vice president; Yuri Taniguchi, Japanese secretary; Mitsuye Kodama, English secretary; Helen Munekiyo, corresponding secretary; Shizu Takeuchi, treasurer. Inouye and Yonemoto will also head the research department, and on the publications committee are Rev. Yoshikami, George Tanaka, Tatsuo Sakamoto, Asako Kubo and Yonemoto.

anization welded together of former individual churches from Oregon, Washington, and California.

With a board member of 200, it is represented by all Buddhist sects, with a predominance of Nishi Hongwanji members. Other churches represented are Higashi, Jodo, Zen, Nichiren, Daishi, and Buddhist Brotherhood of America.

It is a representative overall community organization.

All persons interested in Buddhism are cordially welcome to the services.

o o o

次の通りである。

苦海から拾はれた
此の女は仕合せな家
庭を持つて平和に暮
し一途に夫を愛して
来たが子供がないと
ころから氏神の寺院
に願をかけ五年目に
可愛い女の子を身へ
られたが自分は難産
で死んだのである。

然も子供は其の後幸
福には育てられなか
つた。夫が家を顧み
ず四十九日も済まぬ
に後妻を取つて轉宅
した。子供の身を思
ひますと、どうして
行く可きところに行
けません。とサメ
と泣くのであつ
た。

怖ろしい一夜は明
けた。老僧は早速そ
の朝寺の過去帳を
しらべて見た。申し

て再び脇の下から
冷汗を出したのであ
る。

法名 釋尼妙蓮位

俗名 小松フク

行年 三十三

大正四年五月八日

難産にて死亡

其の後小松フクの

亡霊が礼に出て来た
と言ふ。愛見を想ふ
が化けの話は澤山
にある。

オボンノ

オハナシ

ムタシナセンセイ



今日ハオボンデゴ
センゾサマヲオコツ
リスルダノシイ日デ
スネ。ワタクシタチ
ガ今日マデコウシテ
セイカツデキルノモ
ゴセンゾサマノ、オ
カゲデアリマス。
コノオボントハ、
インドノコトバデ、
ラパンナトイヒマス。
ウラバンナトハ、ニ
ンゲンガサカサマニ
ナルト、ダレデモグ
ルシイデスネ。コノ
サカサマニナルホド
ノクルシミヲ、イ
ンドノコトバデ、ウ
ラバンナトイヒマ
ス。

オシヤカサマニハ
タクザンノ、オデシサ
マガアリマシタ。
ソノナカデ、トクニ
エライ、オデシサマ
ガ十人オラレマシタ。
コノ十人ノオデシ
サマノ中ニ、モクレ
ンソソジヤトイフ
人ガアリマシタ。
モクレンハ、エラ
イ人デアリマシタガ
モクレンノオカアサ
マハワルイ人デ、キ
ンジョノ人カラ、キ
ラハレテキタ人デス
カラ、オソロシイ
チゴクニオケテシ
マヒマシタ。オヤコ
ウ、コウノモクレンハ

シンバイシテ、オイ
シイ、タクザンノ、ゴ
キソウヲ作ツテ、お
母サマニサシアゲマ
シタ。オ母サマハ、
ヨロコビデ、ソノゴ
キソウヲタベヤウ
トスルト、ソレガ火ニ
ナツテ、タベルコトガ
デキマセン。水をの
マウトスルト、ソレガ
マタ火ニナツテ、ノ
ムコトガデキズ、ク
ルシンデ、ホネト
カワバカリニナリマ
シタ。

オヤコウコウノモ
クレンハソレヲミ
テ、タイヘンオドロ
キカナシンデ、オシ
ヤカサマニ、ドウシタ
ラ、オカアサマヲ、オダ
スケスルコトガ、デ
キルノデスカド、オ
ダツネイタシマシタ。
オシヤカサマハ、ソ

ラ、ハジマツタトイフ
コトデアリマス。
オボンノ、日ハ、ミ
シナ、ゲンキデ、オ
ドツテ、ゴセンゾサ
マヲ、オナグサメ
イタシマセウ。ワタ
クシタチノ、ゴセン
ゾサマハ、ワタグシ
タチノ、オイヘニ、ド
レダケ、オホネオリ
下サツタカ、ワカリマ
セン。
ソレヲ思フト、ワタ
クシタチハ、ゴセン
ゾサマヲ、イツモオ
ウヤマヒシテ、コノ
オボンノ、日ハ、ミンナ
デ、ゴセンゾサマノ
ミタマヲ、オムカヘ
イタシマセウ
(オハリ)



お盆の教へ 久保瀬曉明

お盆は感謝と平和と布施の精神を高調する意義ある佛教行事であります。遠くに行つてゐる者で、お盆には必ず故郷に歸つてお墓参りをします。一家揃つてお墓参りをし、佛前に集つて御馳走をいたぐ、子供等は新しい下駄やゆかたを買つて貰ふ。親しい家やお世話になる家には中元の贈り物をする。全くこれらは祖先に感謝し一家親族みな平和に楽しく生活する調和の精神そのものである。

餓鬼道地獄に落ちて倒懸の苦しみを受けておられた目蓮尊者の母上を救ふに、お盆は感謝と平和と布施の精神を高調する意義ある佛教行事であります。遠くに行つてゐる者で、お盆には必ず故郷に歸つてお墓参りをします。一家揃つてお墓参りをし、佛前に集つて御馳走をいたぐ、子供等は新しい下駄やゆかたを買つて貰ふ。親しい家やお世話になる家には中元の贈り物をする。全くこれらは祖先に感謝し一家親族みな平和に楽しく生活する調和の精神そのものである。

お盆は感謝と平和と布施の精神を高調する意義ある佛教行事であります。遠くに行つてゐる者で、お盆には必ず故郷に歸つてお墓参りをします。一家揃つてお墓参りをし、佛前に集つて御馳走をいたぐ、子供等は新しい下駄やゆかたを買つて貰ふ。親しい家やお世話になる家には中元の贈り物をする。全くこれらは祖先に感謝し一家親族みな平和に楽しく生活する調和の精神そのものである。

お盆は感謝と平和と布施の精神を高調する意義ある佛教行事であります。遠くに行つてゐる者で、お盆には必ず故郷に歸つてお墓参りをします。一家揃つてお墓参りをし、佛前に集つて御馳走をいたぐ、子供等は新しい下駄やゆかたを買つて貰ふ。親しい家やお世話になる家には中元の贈り物をする。全くこれらは祖先に感謝し一家親族みな平和に楽しく生活する調和の精神そのものである。

怪談 実話 鶴山生

幽霊が実在するか、こればかりでは、明出来の問題です。然しお化けの出てくるとは日本ばかりでは、しに世界各国に色々と珍らしい話があり、又形も様々で日本の足形がなく、アメリカ産にガウスのやうに徹明体で、台湾の生靈の見る幽霊には首が長いと申します。

この寺に正定さんと云はれる役僧が、獨り本堂裏の六疊間に起居して、毎朝毎夕献花、讀經と御給仕をしてゐました。年は六十近くです。山の中途にある柿の木に、海柿が熟してゐる。晩秋十一月の夜、お寺の内陣の方の勤行を終つた正定さん降出した雨に、早々と雨戸を開け、佛壇の燈火を消して寝に就きました。外は雨と風。枯葉の音と雨だれの音が暗い部屋に淋しく響いて、全く寒い晩でありました。ウトウトと眠つた老僧は、マト真暗な自分の部屋の中、何者とも知らぬ人の氣配を感じて目を醒しました。それで誰だ

と叫んだのです。枕元に夜目にも解る白衣の女性が一人、丸髷の頭、を曲げ、然と坐つてゐました。瘦れはた、様な瘦せが、また血色の無いその顔を見て、老僧は五体から氷の汗を流したのです。一体この夜中にナニナニの用事ですか？

女は正定さんの顔を見、言ひました。凍る様が聲を上げた。こんな夜中、お願ひに上つて、恐れ入りませぬ。私は三年前お葬式をして、頂きました法名を、妙蓮と申すもので、おいますか？

……と、外は相かわらず、泣く様な冷い雨が、ストゥーと降りつゞいてゐた。女の話を



おぼん特輯読み物



盆踊りを偲びて

泉原老生

私共の國元にては 毎年七月から八月に かけて在々諸所のお 寺様にて聞法供養の 盃蘭盆法要が営ま

ちには喜ぶ報恩歡喜の 踊り、往昔沙門目健蓮 慈母の苦惱を救はん として救ひ得ず、溺

度支那日本と三國轉 修の盆會行事が今 中世界的に擴大し我 等佛教徒が一年一度

仰肝に銘ずるの表現 こそ眞実意義ある 盆踊りと存せられま

師して自力の祈願請 求に非らず、信じて助 かる救ひに非らず、

茲に不徳非文を顧み ず聊か御盆歡喜の所 感を述べて日頃懈怠

暑中 御見舞 申上げ候

ハート山佛教團 機関紙黎明同人

西本願寺 鶴山達也 浄土宗 無垢品在真 東本願寺 由上正道

ハート山佛教團ハ、當轉住所内ニ アル各宗各派ノ信徒ヲ以ツテ 組織セル宗敎團體デアリマス。



故 川上小次郎殿 十一月二日七 六十二才	故 橋本新太郎殿 十月二十四日七 六十三才	故 荒木末太郎殿 九月二十四日七 七十二才	故 古田愛子殿 九月廿七日七 二十二才	故 落合與一殿 九月十三日七 六十才	故 本田新次郎殿 九月三日七 六十五才	故 岡本徳次郎殿 八月二十八日七 六十才	八丁山センター 同院先亡諸靈 自五四年至五四年六月
故 菅野文一殿 十二月十八日七 六十六才	故 渡邊ジエ子殿 十二月十七日七 幼兒	故 廿ベジ小分殿 十二月五日七 五十四才	故 竹内芳子殿 十二月四日七 二十七才	故 米田新藏殿 十二月三日七 六十七才	故 井上友治殿 十一月十六日七 五十六才	故 西山善一郎殿 十一月十日七 三十九才	故 河本七口殿 十一月八日七 四十五才
故 前田民次郎殿 一月九日七 七十二才	故 米村(幼兒)殿 一月十二日七	故 小野欣一殿 一月二日七 二十三才	故 後藤辰次殿 十二月廿九日七 七十二才	故 畑中乙平殿 十二月二十六日七 六十八才	故 木下(幼兒)殿 十二月二十五日七	故 小澤(幼兒)殿 十二月十九日七	故 大城英輝殿 十二月十九日七 五十五才
故 佐藤喜八殿 三月九日七 六十四才	故 檜木正治殿 二月二十四日七 一才	故 河村ジヨウ殿 二月十九日七 五十四才	故 藤井善一殿 二月十六日七 六十六才	故 澁谷トヲ殿 二月六日七 五十一才	故 三牧フジ殿 一月二十八日七 五十三才	故 宇野八郎殿 一月二十日七 四十八才	故 上田平三郎殿 一月二十日七 七十三才
故 堀野千三殿 六月廿七日七 四十七才	故 鈴木政平殿 六月廿七日七 六十八才	故 宮口善男殿 六月廿七日七 六十二才	故 前田子之次殿 六月十五日七 六十二才	故 住田茂殿 五月二十九日七 四十一才	故 野村精市殿 五月十七日七 六十三才	故 仙立滿平殿 四月十六日七 六十二才	故 坂本吾市殿 三月二十七日七 六十九才

連法話
心に任す(四)

業發にこの身をまかせたら不平なく明るくその日の仕事にいらしむことが出来るだらふ。たゞ一つまかせてならぬいのけ心である。心にまかせると必ず必ず怪我過ちがあると言ふ。何故に心に任せてはならぬのたらふか。これについて何より心と云ふものを深く吟味してみる必要がある。吾々はとかく反省不足の結果、心の真相をばつさり突止めずた漫然と心のまゝに振舞つてゐるのであるが、心は常識が考へてゐる程、それ程信用に價するし

法要

- 廿五伍、木昇氏は義父の追悼法要を
- 八區井上泰見氏は亡父天涯院功譽義寛居士の七年忌を
- 山口縣人は同縣出身先亡者の追悼会を夫々営めり。
- 寄附八區井上泰見氏は父七年忌に當り金一封を敎團に寄附せられた。

黎明



大地を踏み者

由上生

我等は人生を冷然としてばならない。現実的に目をつぶつて人生から離れてはならない。萬人と共に、まいかに人生の惱を憐み、限りなく人生を愛念してゆかねばならない。「独りで祈るは尊し、萬人と共に祈るは尚ほ尊し」とは味はふべき言葉である。法藏菩薩が超世の誓願を發起せられし時、大地は六種に震動したではないか。

我等は法藏魂を深く體驗して、限りなく人生を痛み、限りなく人生を超えてゆく菩薩である。

發行日 毎土曜
 發行所 山佛放團
 事務所 所十七區廿五

聖人愚ナルニアラズ、我賢ナルニアラズ、我共ニ凡夫ナル相アムベシ

お盆の御案内

七月十日(土)十一日(日)

皆々様には何かと不自由がちの戦時下に在りながら、生活向上のため御健闘の致お慶び申上げます。

さて、今や吾々センター一萬の同胞は、再び無限の感慨とよろこびを以つて、轉任所内に於けるお盆を迎へることになりました。茲に吾がハート山佛放團に於きましては、別欄掲載のプログラムの如く、この大切な東洋傳統のお盆行事を退轉なく營み、我等の精神的反省向上を念願し、且つは當轉任所生活中に悲しくもまた雄々しくもハート山高原の土深く永久の眠りに入り給ひし三十有餘名の尊靈、並びに他センターに於いて同じく鬼籍に入られし同胞先輩の雄魂に慰靈感謝の誠を捧げることになりました。

何卒皆々様方には當日は老幼男女打連れ、この意義深き盆法要又は慰靈歡喜の盆おどりに、御参加下さいますよう故に謹んで紙上を以つて御案内申上げる次第であります。

七月十日日本紙は休刊いたします

盆委員會

七月七日(水)午後七時半
 於十七區二十五

お盆を控えて

大多亡の佛放團

センター一萬の同胞が心待ちに待つてゐる七月十日、十一日のお盆を前にして、佛放團並に婦人會では、總務部をはじめ、踊り、裝飾、會場、造花、法務、食料その他各部門の委員達は、當日の準備遺憾なきを期し、晝夜多大忙大混雑を極めてゐる。又黎明本號は六頁大のお盆特輯號を讀者に呈供することになり、係り毎晩をそくまで大活動をしてゐる。

日校生徒の渠

井上泰見

子供の時(四)に良い見は大きくなつて必らずえらい人になるのであるから、子供の時の平生の心掛が一番大切であります。大きくなつてえらい人になり、えらい子供の時、なんか悪かつたつてい、だらうななどと考へるのは大へん間違ひであります。悪い苗から良い實を取らうと考へると同じことでありまして、子供の時から平生心掛が悪くては大に入らなつてから急にえらいなる譯がありません。

教會案内

七月四日(日曜)

十四區佛教會

●日校 午前九時

●説教 午後二時

信原分齊

泉原先生

十七區教會

●日校 午前九時

●青年礼拝 十時半

●説教 午後二時

信仰と人生

鶴山先生

お盆の精神

久保瀬先生

二十四區佛教會

●日校 午前九時

●説教 午後二時

念佛の人親爲

由上先生

おぼんのいけら

無垢品先生

●眞鈔講話

●毎水曜夜

●十七區教會

●泉原先生